

「WILDERNESS な人達」 ～サンフランシスコ周辺から始まる自転車フィロソフィー～

多くの先人達からの影響を受けて生まれた近年の東京サンエスオリジナル製品。1990 年から販売店向けに発行している元祖「サンエスウォッチング」から、そんなオリジナル製品を生み出す以前の濃密な体験を掲載した『アメリカ WTB レポート』を再編集してお届けします。写真はそのままですが悪しからず。

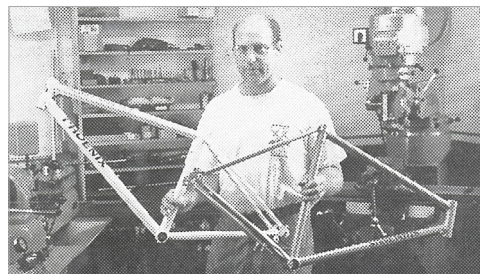
▷サンフランシスコからゴールデンゲートブリッジを渡って車で 30 分、MTB 発祥とされる山の麓に MTB 殿堂入りの 3 人が『WTB (Wilderness Trail Bikes)』を結成しました。多種自転車製品の開発を進め、日本での生産も始めていた今から 30 年ほど前、彼らの事務所や工房を訪問した時の創業者 3 人のお話。

▶「Mark Slate マーク・スレート」は、米国有名完成車メーカー S 社のタイヤを殆ど手掛けるなど、製品デザインの世界で一流でした。とても感覚的な閃きに優れ、そのデザインアイデアの発端から独自性とバランスの良さが感じられ、今でも WTB の製品デザインを手掛けています。彼からサドルデザインの感覚性を教えていただき、製品デザインをする上での想像と創造について影響を受けました。後に彼がアジア好きであることを東京上野の宵の口、とりわけ濃厚に知らされましたが、心底優しいジェントルマンです。



◀ WTB サドルのスタンダードとなってるドロップノーズ形状はこの時代から商品として出来上がっていました。マーク・スレートの代表作です。

▶「STEVE POTTS スティーブ・ポッツ」は、プロのモーターバイクライダー出身。誰よりも美しいと言われる溶接と徹底的な芯出しフレームを作るビルダーとして西海岸の通の間で評価が高く、興味津々でした。同った工房は街道沿いのボロ屋（失礼）。軒先きに置かれた埃だらけの 60 年代アメ車もとても印象的で絵になっていました。その風景と美の極みと言えるその華麗なフィレットフレームとの対比から、真正面から物作りを行う純粋な精神を垣間見たような思いでした。信念の筋が誠に太い印象で、レジェンドであり今も活躍するビルダーです。

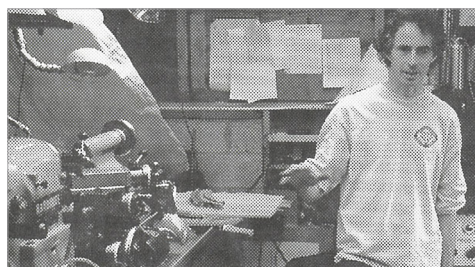


◀ STEVE POTTS フレーム（写真右）と WTB PHOENIX フレーム（写真左）を掲げる若かり頃のスティーブ。撮影ポジションにやたら拘ったことを記憶しています。この時既に彼は WTB に距離を置きはじめてるように感じました。



◀ PHOENIX フレームの MTB。

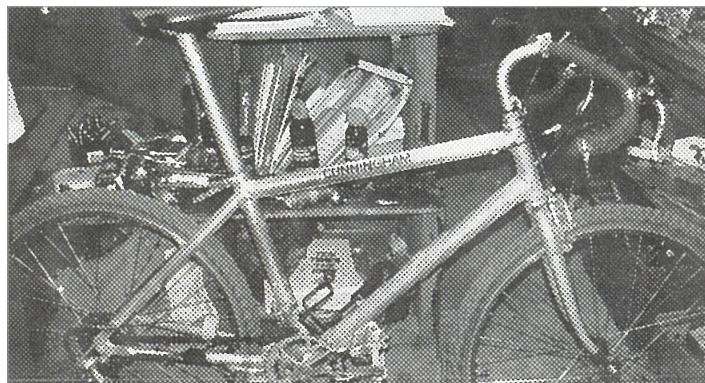
▶「Charlie Cunningham チャーリー・カニンガム」は発明家。彼の工房は少し山深い「ジョージ・ルーカス」の隠れスタジオ近くのバラック物置風。その中には最新の工作機やコンピュータが無造作に置かれ、0.001mm の誤差内で試作品を作っていました。本人からの製品解説の内容にも付いていけず…。彼は多くの革新的発明を日本含む大手メーカーに提供してきました。楽しそうに研究する発明家の姿は聖人のようでした。しかし何と言っても驚きは、自宅が木の上にあったこと。工房に隣接する 10 メートル超の大木の上にハシゴやロープで登っていくんです。トイレどうするの？と聞きましたらニコニコ笑ってました・・・。



◀カニンガムは自転車界以外の機械の発明試作も行っていました。組織の枠には到底収まらないだろうことは、安易に読み取れました。



▶ WTB の代表作「グリスガード」システムは日本のメーカーも採用。



▲工房内には雑然と自転車もあり、これは 1984 年に制作されたオーバーサイズアルミ「CUNNINGHAM BIKE」。アルミオフロードフレームのパイオニア。

▷東京サンエスではこの訪問をきっかけとして日本での WTB 製品販売を 1996 年から始めました。但し、PHOENIX フレームは生産とコストのバランスが取れずに発表後に発売を中止。ブレーキやハブ、タイヤやサドルなどを 5 年程取り扱いし終了しました。数年後、彼らは組織も製品も選択と集中を重ねサドルとタイヤを中心に世界的有名ブランドとなりました。その本質にある先人達からの自転車哲学は現在も受け継がれ、商品に反映されていることでしょう。



◀ MTB 発祥の地とされる「Mt. Tam = マウント タマルバイス」周辺。「リッチー」「フィッシャー」「ブリーズ」達とともに、カニンガムもファイヤーロードを駆け巡っていたそうです。

● 次回、月刊サンエスウォッチング Vol.39 ～サンフランシスコ周辺から始まる自転車ロジック～ は 2021 年 9 月 10 日（金）の配信予定です。